



第185號 (第 16 卷)

(昭和11年) 8 月 號

天文學研究の特異性

(卷 頭)

雑誌“科學”の8月號に北海道大學教授中谷博士が、去る6月19日の皆既食觀測に上斜里の英國隊を補助されたときの感想を載せてゐられる。其の文中に中谷教授は、物理學者の立場から見た天文家の仕事のやり方を見て、

- (1) 必然の成功を期するため、準備の完全せること
- (2) 觀測のプログラム上に嚴格なる統制の行はれてゐること

の2點を、可なり珍しいものであるように書いてゐられる。

上の2點を、中谷教授が認められたことは誠に尤もなことであるが、我々天文家としては、上記の2點は、常に皆既日食の場合のみならず、いかなる場合にも重要なことと心掛け、且つ、實行してゐるのであつて、少しも目新しいものではない、むしろ、人から言はれて見て、今更、“我々の天文研究法”から見ると、他の學術研究は、(1')準備の完全といふことをやかましく言はないで、若し仕事が失敗するならば、幾度でもやり直すのが普通であり、又、(2')研究者の統制を必要とする程に大がかりのものが多くないのだろうと言はなければなるまい。しかし、天體現象は全く吾々のコントロールし得ざる現象であるから、現象の見える好いチャンスを逃がさないためには、準備と統制とは絶対に必要なことが、特に近代天文學研究の特徴だと言っても好かろう。少なくとも、準備に缺點があり、統制が行はれない天文觀測は“だらしない”研究であると批評されるべきものである。

しかし、今日の大學あたりで、天文家の卵となるべき若い學生たちは、理學部に於いて、數學や、物理學や、化學などを専攻する學生たちと机を並べ、又さうした方面の訓練を受ける時間が多くて、純粹の天文學——殊に天體の

實地觀測術を體驗することが案外少いやうに出來てゐるので。とかく、“失敗すれば、やり直すまでだ！”とか、“研究は自由であれば好い。天文臺の内部は群雄割據で好いのだ”と言つたやうな印象を受け、或はそんな心持ちを養成される。従つて我が日本には、人員が多いに拘らず、割合ひに業績の舉らないやうな天文臺などが出來易い。こうした點に於いても、外國の天文臺のやり方は大に學ぶべきものが多い。歐洲の如き傳統の古い國々の天文臺などは言ふに及ばず、新進の米國でもキルソン山や、リクや、ヤーキース、ハーバード大學あたりの、有力な天文臺は、一見して群雄割據のやうではあるが、よく見ると、皆、臺長の統制が嚴肅に行はれ、美しい觀測プログラムが進められつつあるのであつて、筆者は先年ヤーキース天文臺に滞在中、一新彗星の出現期間に、臺員一同は盲目のプロスト臺長の統制の下に、軍隊のやうな組織で觀測が進められつつあるのを見た。又ハーバード大學天文臺ではベイリ、キング等の老博士たちが、自分の息子の如き若年のシャプレイ臺長の統制に服し、最近には又、ヤーキース天文臺に於いて、バンビースブルク、ロス等の老熟した學者たちが、數年前までは身自ら指導した若きストローフェ博士を新臺長として、其の命令に服しつつある實況を、まのあたり見たことがある。

準備の周到といふことも大學の新卒業生などは、とかく不眞面目にしか考へない者が多い。此のために、晴夜、觀測開始に際して、思はずも失敗を曝露したり、惜しい千載一遇の好機を逃がしたりするのであつて、所謂“とりかへしの付かない”ことを多くは、準備不完全のためにやつて了うのである。不謹慎な觀測者は、“觀測は夜間の仕事であるから、晝間は休養の時間だ”などと、一寸氣のきいたやうなことを言ふものであるが、之れは實に“以つてのほか”で、すべからく“晝間は觀測準備の時間である”ことを心得て置くべきである。

敢へて、ひろく公私の天體觀測者の注意を促す所以である。(山本)